

関孝和

【せき・たかかず】



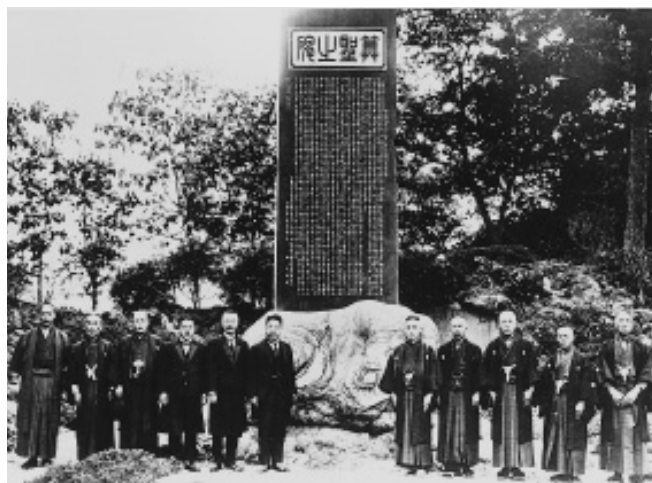
関孝和坐像（市民ホール前）

11月3日に、藤岡で「関孝和先生顕彰全日本珠算競技大会」が開かれます。この大会は昭和25年から続いていて、藤岡の伝統的な行事になっています。

孝和は、算木さんぎを使って高次方程式を解く天元術てんげんじゆつに改良を加えて、筆算式ひつざんしきの高等代数学である点竄術てんざんじゆつを発明したのです。そして、数学のほとんどの分野における理論的研究を行い、その体系化を試みるなど、その高度な能力は驚嘆に値します。明治以降、欧米の文化が入り数学も一変しました。しかし、和算を学んだ人たちが、その後の日本の数学を飛躍的に進歩させたことは明らかであり、孝和の業績は偉大だったのです。同時代のイギリスのニュートン、ドイツのライプニッツとともに世界の三大数学者として、その業績は高く評価されました。

このように偉大な人物でありながら孝和についてはよく分らないことが多いのです。その一つは、生まれた年ですが、寛永14年（1637）とも寛永19年ともいわれています。孝和の父親内山永明なかあきらが、寛永16年に江戸城の天守を守衛する御天守番ごてんしゆばんとなり、藤岡から江戸へ出ているので、14年生れなら藤岡生まれ、19年なら江戸生まれの可能性が高くなります。ここでは14年説で話を進めることにします。

孝和の幼いときは内山新助といました。男4人と女2人の6人兄弟の2男に生まれました。10歳のとき、両親が亡くなったので、関家で育てられ、関の姓を名のようにになりました。少年時代に吉沢恭周きさくしゆう、そしてその後、高原吉種よしたねに学んだとされている書物も多いのですが、恭周については時代のずれがありますし、吉種についても師事した明確な根拠が見当たりません。ま



昭和4年に藤岡城跡東側に建立された「算聖之碑」（現在は市民ホール前）

◎ 関 孝和

た、孝和は独立して師につかなかったともいわれますが、独力では、高価でしかも希少な存在であった天文や暦学の書物を手することは難しかったのではないのでしょうか。

青年期の孝和についてもよく分かっていませんが、『関孝和全集』の著者である平山諦氏は、孝和の著作である『発微算法』に、三瀧四郎右衛門と三俣八左衛門が校正したと記されていることについて、次のような仮説を立てています。三瀧は現在の太田市の人であるが、三俣についてはどこの人か分らない。しかし、三俣姓は藤岡近辺に多いことから、この地の人であり、孝和は25歳位るとき藤岡またはその近くで塾を開き和算を教えたり、著作の仕事をしたことがあるのではないか」というのです。しかしこれはあくまでも仮説であり、孝和の少年期・青年期については、今後さらに研究が必要でしょう。

さて、孝和は30歳のころから、甲府の徳川綱重、そして、その後綱豊に仕えて、勘定所の事務一切を検査する勘定吟味役を務めました。土地の調査なども仕事の一つで測量の仕事もしました。孝和の署名のある検地帳が30数冊、山梨県の春日居町郷土館や明野村郷土館などに所蔵されています。その後、主君の綱豊が6代將軍(家宣)になったので、これに従って江戸幕府に勤め、桜田御殿の御納戸頭として、金品の出納などを扱う仕事をして200石を給されました。その後、宝永元年には西丸の御納戸組頭になりましたが、宝永5年(1708)10月24日に江戸で亡くなりました。71歳でした。新宿区弁天町の浄輪寺というお寺にお墓があり、東京都史跡に指定されています。この墓碑には「上州藤岡に生まれる」と刻まれています。

藤岡市内には、市民ホール前に「算聖の碑」や「関孝和坐像」があり孝和の業績を偲ぶことができます。平成8年からは日本数学会の関孝和賞の副賞として、市から孝和のブロンズ像を贈るようになりました。また、小中学生を対象とした、「おもしろ数学教室」を開くなど、孝和を顕彰する行事が行なわれています。死後孝和を「こうわ」と尊称で呼ぶこともあります。



東京都史跡の関孝和墓碑（東京都浄輪寺）



東京都浄輪寺入口にある「都史跡」の標柱